

留萌港の夜明け



南岸雑貨岸壁も整備された



海深し 潮満つ朝
天産の豊けき積みて
船出なす とどろの汽笛
あゝ留萌
時代の都 躍進の
意気は あがれり

—留萌市民歌から—



最北端の不凍港として冬といわず活況

ことしは、飛躍する留萌港にとつてある面からいつて夜明けを迎えたといえる。明治時代に、先覚者たちが、多くの苦難をのり越えて、かつての留萌川河口に画期的な港を作つて以後、時貿易実績の不振から開港場閉鎖という危機をも迎へながら、今日の留萌港は全道港湾中その伸長率では毎年首位を占めるまでに成長した。

しかし、留萌港の活躍はいままでのように主に、石炭、木材の積出し港としてのみではなく、旭川を中心とする道北背後地経済圏の表玄関として、商業港としての役割りがある。すでに、南岸には、五千トン級の貨物船が一度に三隻横づけして荷役ができる雑貨岸壁が整備された。雑貨上屋倉庫の不足解消のため、留萌市と留萌港開発会社が近代的な公共上屋及び倉庫をめぐらして進められる新港湾整備五カ年計画も、ことしからである。

留萌港の姿を大きく変える一万吨雑貨岸壁を北岸に造成することをはじめとして、外材の輸入増にそなへ、木材整理水面の建造、南岸ローダーの増設、定温冷蔵庫の完成、南防波堤のかさ上げと延長、北防波堤の延長、東岸漁船船だまりの建設など多くの計画がスタートする。

それは、あすへの留萌港の夜明けだといえよう。

しかし、旭川の本当の表玄関となるには、年間一千万トン取扱能力と三十分間で連絡出来る直線高速道路とが完成しなければならぬ。

<留萌港の果す役割り、市民生活への影響などの特集を近く予定しています>